

CIFLE Report No. 50

英語教師の英語力とは

田中茂範（ココネ言語教育研究所）

はじめに

教師の英語力とは何か？よく英検で準1級以上だとか TOEIC で 750 点以上といった基準が教師に求められる英語力として示されることがある。しかし、これは、教師の英語力を見るにはかなり荒っぽい指標である。なぜなら、英検で準1級をとることが、どういう英語力を保証するのかが判然としないからである。昨今は、中学生で準1級をとる生徒も少なくない。このことを考えれば英検の級が教師の英語力を保証するものでないことは明らかである。同様のことが TOEIC にもいえ、たとえ 950 点とっても、英語が使えない人が少なくないことを筆者は知っている。身近にそういうひとがたくさんいるからである。

教師の英語力は高校生や大学生の英語力とは違うはずである。教師に求められる英語力は、英語を説明するメタ言語的知識を含む。英語の善し悪しを感じ取る文体的感受性も必要である。授業を運営するには、生徒に指示を出し、活動の流れを調整し、活動についての評価やフィードバックを与える英語が求められる。もっといえば、生徒にとっての新出単語が出た場合、その使い方などを説明できる英語力が必要である。もちろん、文法も日本語を使わないで指導することができなければならない。英文を音読することができることは当然である。音読といっても情感を込めて読む力が必要である。

教師の英語力

「英検準1級が教師に求められる英語力だ」といっても漠然としている。そこで必要なのは、「教師が何をするときの英語か」を明らかにして議論することである。どんな授業であれ、英語で授業をする際に、教師は次の3つのタスクをなんらかの形で行っているように思う。

1. 生徒の発言に英語でフィードバック（評価）を与える
2. 生徒に英語で活動をさせ、それにアドバイスを与える
3. 内容の理解と新出単語・文法の説明を英語で行う

本稿では、この3つのタスクとの関連で教師の英語力についての私見を述べてみたい。

生徒の発言にフィードバックを与える：教室の雰囲気を作る

まず、授業でほめたり、励ましたりすることは、よい学習環境（雰囲気）を作る上で重要である。このことは、教育学が教えるところである。生徒をほめる先生とほめない先生を比

べると、生徒はほめる先生（の授業）に対して、より好感を覚えるようである。コトバが心を動かすのである。実際、ほめられたり、励まされたりすることで生徒はやる気を出すということを、教師であれば経験的に知っているはずである。

しかし、「ほめる」といっても、Good job!—これはすばらしいコトバであることは間違いが—をただ繰り返すだけでは効果は薄い。というのは、「あの先生はなんでも Good job! という」といった具合に受け止められる可能性があるからである。ほめたり励ましたりする行為は、教育的にみれば、評価の現れである。評価というものは、生徒が納得したときに効果を生む。そこで、状況に応じた「ほめコトバ」「激励のコトバ」を教師はレパートリーとして持っておかなければならない。以下はその例である。

ほめるコトバ・励ますコトバ

Nice work! /Great job! (Satoshi/ team A / everybody)

(You did a) good/ great job /You (all) did very well.

That's the best today / this week/ this term/ this year.

You're getting much better.

Keep going. / Don't give up/ You can do it!

That's a good idea but not quite what I was looking for.

Have a guess. / If you don't know, just guess.

評価としてのほめ言葉は、具体的に個人やチームに向けられたとき、心に届きやすい。そこで、Good job!というだけでなく、Good job, Satoshi.とか Nice work, team A. のように評価の差し向け先を具体的にするほうがよい。全員に向けたときは、Great job, everybody.となるだろう。同じ Great job!でも、You did a great job, Satoshi. となると表現に変化が生まれる。英語教師はこうしたコトバの効果を理解した上で使えるようであればならない。“Positivity spreads.” が学習環境においては必要だが、それに大きく寄与するのが教師のコトバだからである。

英語で活動させ、それに誤りなどの訂正を行う

英語教師の英語力には、生徒たちを英語で活動させ、適宜誤りなどの訂正を行うことができるということが含まれる。教師にとってのこのタスクを英語で行う際に、個別具体的な課題によって英語表現の内容は異なるが、以下がその例だろう。

Today, we are going to talk about “A Mason-Dixon Memory.” As you remember, we've already read the whole story more than once. However, let us take a look at the passage we want to focus on once again. <Read the passage> Now we have a question. This passage says, “They knew that there was something even more important.” What is

“something even more important” to them? Now, let us make five groups of six people. You make five groups as you like. I’ll give you one minute. ... OK, time’s up. The goal of your discussion is to reach the group opinion about the question. Let’s have an active discussion. Later you are going to make a 2 or 3-minutes presentation. You have 15 minutes for your discussion.

表現をみると、Today, we are going to talk about ...とか As you remember とか let us take a

look at ...など慣用的な表現が多く含まれている。慣用表現をうまく使うことができることが教師の英

語力には含まれる。このこととの関連でいえば、教師自ら、自分が日常的に使う英語を分析してみる

と、ある特定の表現を繰り返し使っていることに気づくだろう。これを教室内での「マイ慣用表現」と見

なすことができる。そして、英語でスムーズに活動を行うには、活動をガイドするための「マイ慣用表

現」を生徒と共有しておくといよい。教師によって、好む表現には個人差があるが、例えば、以下をよく

使うということがわかれば、それを共有することで、英語で授業する際のミニマル・エッセンシャルズ

が整うことになる。

教師 A がよく使う「マイ慣用表現」

Let’s take a look at the following passage.

Listen carefully. / Listen up.

This is a useful sentence pattern.

Let me put it this way.

Let me use brackets here.

I’m going to ask you some questions about this passage.

Underline the words you don’t know.

Draw a picture of the animal described here.

例えば、Let me use brackets here. は文法構造を説明する際に教師 A は「括弧」を使うが、その際の表現である。

なお、活動中に、間違いを質すということが必ず起こる。その場合、教師は英語でのやりとりを通して生徒に誤りに気づかせることができるような方法 (focus-on-form の方法) を

知っておきたい。誤りの訂正には明示的なものと暗示的なものがあるが、暗示的な方法が有効だといわれる。やりとりのなかでさりげなく（やりとりの流れをこわさないように）形（form）に注視させるのである。例えば、Last night I saw a bad dream. という生徒に、教師が、Oh, you had a bad dream last night. What kind of dream did you have? と応じれば、生徒は、see a dream ではなく have a dream だということに気が付く可能性がある。こうした英語のやりとりができること、これも教師の英語力の要素である。

内容の理解と新出単語や文法の説明

おそらく、日本人の英語教師にとってむずかしいのは、英文の内容の理解だとか、新出単語や文法を英語で説明するというタスクであろう。日本語であれば簡単なタスクだが、英語でやると「まどろこしさ」が出てくるだけでなく、生徒も曖昧性を抱えたままの理解になるということがわかるからである。しかし、そこを英語でやり抜けるというのが英語教師力である。例えば、以下のような文章を読んでいるとしよう。

Squirrels help oak trees to grow by burying acorns. They dig up and eat some of the acorns, but not all of them. In spring, the forgotten acorns take root and sprout as young trees.

内容理解を促すには発問が有効である。ただ、生徒のレベルに合わせて、発問の仕方を工夫しなければならない。このレベル調整力が教師の英語に求められる。

What is a squirrel? Do you know what a squirrel is? (T presents three pictures showing different animals.) Show me the right picture. (S chooses picture 3) Yes, that's right. Squirrels live in the woods. What do they eat? (S says, "Acorns.")

さらに、What do they help? How do they help oak trees? What happens in spring? など内容に即して質問を投げかけていく。発問力は英語教師の英語の要となる力のひとつである。

未知語については、生徒に知らない単語（表現）に下線を引かせる。そして、黒板に生徒たちが知らない単語を書きだす。例えば、oak trees, dig up, the forgotten acorns に生徒の多くが下線を引いたとする。すると、教師は、次のような説明をするだろう。

an oak tree : It's a kind of tree. T shows a picture of an oak tree. "An oak tree" is "櫟の
木" in Japanese.

dig up : T does the action of digging up.

the forgotten acorns : T uses Japanese and says, “The forgotten acorns means “忘れられていたどんぐりたち” in Japanese.

an oak tree のような具体物の場合は、写真やイラストを見せる方法がある。ヴィジュアルは語彙指導の補助教材として必須である。しかし、見ても何の木かわからない場合は、”An oak tree is “櫟の木” in Japanese. と説明を加える。この表現形式は、日本にきている外国人に英語で日本のものを説明する際に有効である。dig up の場合は、教師が「穴を掘る」動作をするといいだろう。もちろん、イラストなどを描いて補ってもよい。そして、the forgotten acorns の場合は、イラストで示すことは容易ではない。Forgotten については forget-forgot-forgotten の語形変化を学んでいる場合はそこに注目させてもよい。ヴィジュアルで示すことができない場合は、The phrase “the forgotten acorns” means “忘れられたどんぐりたち” in Japanese. と表現すればよいだろう。日本語を使う際には、英語表現の中で使うことが鉄則である。

さて、文法指導についてだが、不定詞も関係代名詞も表現のパターンとして扱うことで、日本語の説明は不要になる。例えば、上の文章の中から help A to do B by doing C に注目したとしよう。

T: Let us take a look at the sentence here. I'll write it on the board.

板書 : Squirrels help oak trees to grow by burying acorns.

T: What do squirrels help?

S: Oak trees.

T: Yes. That's right. But the sentence says, “Squirrels help oak trees to grow.”

Let me use brackets to show what squirrels help:

板書 : Squirrels help [oak trees to grow]

The next question is how? How do they help oak trees to grow?

S: By burying acorns.

T: Yes, by burying acorns. Now we have a useful sentence pattern:

板書 : help A to do B by doing C

I want each of you to write your own sentence using this pattern.

(Student A writes the following)

I help my little brother to do his homework by saying “Work harder.” (Taro Sagawa)

help A to do B by doing C に注目させて、生徒に自分の表現を作らせる。上記の例のように、生徒が作った文章には「作者」として名前を付けさせるとよい。そのことで、自分事として英語表現を行うという態度が芽生えるきっかけとなる可能性がある。

このように教師の英語力は、授業を英語で運営する力である。本稿では、3つのタスクに注目して、英語教師が鍛えていかなければならない英語力についての私見を述べた。教師自身が、英語が自然に使われる意味空間を創ることが肝心である。

註：本稿は、PEN英語教師塾 (pen-edu.jp) の中の動画「英語は英語で」を元にして執筆したものである。